

中学生を対象とする情報モラル育成 のための指導内容の検討

野原 健^{*1} 加藤直樹^{*2}

〔概要〕中学生を対象として、計画的に情報モラルを育成するためには、どんな内容をいつ指導すると効果的であるのかを計画・立案した。インターネットに代表される情報通信手段の普及は、学校教育段階からの情報モラルの指導を必要としており、そのためのカリキュラム開発の基礎資料とするものである。

〔キーワード〕情報モラル、情報教育、情報活用能力、情報リテラシー、情報教育カリキュラム

I はじめに

高度情報化社会が到来し、情報というもののについて一般の関心が高まるとともに、情報そのものに価値があることを多くの市民が認識するようになった。そして、情報を有効に活用しようとする者と不健全な意図をもって利用しようとする者が現れるようになった。すなわち、情報を取りまく光の部分と影の部分とが明らかになったのである。しかも、インターネットや携帯電話の普及によって、児童・生徒も大きな影響を受けている。

光の輝きが大きければ大きいほど、その影もはっきりと現れるように、情報の影の部分映し出す事態について法的措置は必ずしも万全ではないことが判明している。また、このような加害者あるいは被害者になり得る可能性のある者は、年齢の如何は問わない。そうすると、法的制裁では埋められない空白部分を補完するルールが必要になってくる。

その中で応用倫理学の中に情報倫理学が生まれた。社団法人私立大学情報教育協会によれば、「情報倫理」は「情報化社会において、われわれが社会生活を営む上で、他人の権利との衝突を避けるべく、各個人が最低限守るべきルールである。」と定義される。であるとすれば、「情報倫理」は年齢の如何を問わず社会に生きるものとして当然に要求されるものであり、幼児期に始まり、初等教育から高等教育を経て、社会人になってもなお修得すべきことである。適切な教育が必要不可欠になってくるのであり、先行する教育成果の上に次々と積み重ねられ、蓄積されるべきことであって、ある特定の段階になって初めて教育すれば足りるという性格のもの

のではない。その意味において、生涯教育の課題であるともいえる。¹⁾

なお、情報教育においては「情報倫理」という用語よりも「情報モラル」という用語の方が用いられるため、本研究においてもこちらの用語を使用する。

II 情報モラルで指導すべき内容

文部科学省発行の『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～²⁾によれば、初等中等教育における情報教育は、情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度、の3つの要素から構成される情報活用能力をバランスよく育成することを目標としている。各学校段階における情報教育の実施については、小学校段階では、各教科等の具体的、体験的活動の中で「情報活用の実践力」の育成を図ることを基本とし、中学校段階以降では、独立した必修の教科・領域を設けるとともに、各教科等で情報手段を積極的に活用することとしている。情報モラルは、情報社会に参画する態度に含まれるものであるので、情報活用能力の育成をする中で、系統的に指導がなされる必要がある。

コンピュータ教育開発センターが文部科学省の委託事業として作成した『インターネット活用のための情報モラル指導事例集³⁾』では、〈表1〉のような学校種別・学年に情報モラルの指導を位置づけている。この事例集では、全20項目のうち19項目について中学校で指導するのにふさわしい内容としている。中でも「出会い系サイト」「情報の改ざん」「不正アクセス」「人間関係の希薄化」の4項目については、

*1 takeshi nohara : 岐阜県揖斐郡揖斐川町立揖斐川中学校 e-mail nohara@crdc.gifu-u.ac.jp

*2 naoki kato : 岐阜大学総合情報メディアセンター e-mail nkato@cc.gifu-u.ac.jp

小学校での指導がなく、中学校から指導するように位置づけられている。

Ⅲ 技術・家庭科における指導計画

＜表1＞情報モラルの問題項目の位置づけ

問題項目	学校種別 ・学年	小学校			中学校	高校
		低学年	中学年	高学年		
有害サイト			○	○		
商品の購入問題				○	○	○
禁制品等の購入				○	○	○
虚偽広告・詐欺情報				○	○	○
マルチ商法・ネズミ講				○	○	○
情報の信憑性			○	○	○	○
出会い系サイト					○	○
電子メールの受信				○	○	○
著作権			○	○	○	○
プライバシーの侵害				○	○	○
誹謗・中傷				○	○	
個人情報の流出				○	○	○
情報の改ざん					○	○
電子メールの発信				○	○	
なりすまし			○	○	○	○
不正アクセス					○	○
コンピュータウィルス			○	○	○	○
人間関係の希薄化					○	○
仮想現実問題			○	○	○	○
身体に与える影響			○	○	○	○

この表をもとにして、技術・家庭科の技術分野「情報とコンピュータ」における指導計画を＜表2＞のように立案した。その際に考慮したことは以下の通りである。

まず1学年では、校内のコンピュータ利用のルールを知り、その意味を考えさせる。これには、2点の理由がある。1点目は、多くの学校で1学年に「技術とものづくり」を中心とした指導計画を立てていることから、「情報とコンピュータ」の内容は短時間で行う必要があること。2点目は、1学期のうちから総合的な学習などでコンピュータを利用する可能性が高く、校内ルールについての指導が必要になるためである。1学年における情報モラルの指導時間は、35時間中の3時間程度を予定している。

次に2学年では、多くの学校で「情報とコンピュータ」を中心とした指導計画が立てられて

いるので、ある程度の時間をかけてネットワークの利用に関連した学習で情報モラルを取り扱えると考えた。2学年における指導時間は、35時間中の8時間程度を予定している。

そして3学年では、Webページの制作を通して人権に関わる内容を扱いたいと考えた。その理由は、社会科の学習で人権についての学習をするため指導内容の定着が図りやすいこと、多くの学校で「情報とコンピュータ」の発展的な内容を扱うことからWebページの制作と関連させることができることの2点である。3学年における指導時間は、17時間中の5時間程度（制作時間を含む）を予定している。

＜表2＞「情報とコンピュータ」における指導計画

	授業内容	問題項目
1学年	校内ルール	電子メールの受信・発信
		誹謗・中傷
		なりすまし
		身体に与える影響
2学年	ネットワークの利用	コンピュータウィルス
		商品の購入問題
		禁制品等の購入
		虚偽広告・詐欺情報
		マルチ商法・ネズミ講
		個人情報の流出
		情報の改ざん
		仮想現実問題
		人間関係の希薄化
3学年	Webページの制作	出会い系サイト
		著作権
		プライバシーの侵害
		不正アクセス

Ⅳ おわりに

本研究は、実践を通してこそ意味のあるものができると考えられるので、自分自身はもちろんのこと、いろいろな場を通じて相互に実践を交流することにより、さらに効果的な指導のあり方を探っていきたいと考えている。

〔参考文献〕

- 1) 梅本吉彦編『情報社会と情報倫理』丸善株式会社 2002年 pp.1-5
- 2) 文部科学省『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～』2002年 pp.1-7
- 3) コンピュータ教育開発センター『インターネット活用のための情報モラル指導事例集』2001年